

[ 論文 ]

## 朝河貫一：自覚ある「国際人」

明治末から大正にかけてイエール大学に見る日本人研究者事情

増井由紀美\*

### Asakawa Kan'ichi: A Cosmopolitan Life at Yale University in the Early 20th Century

Yukimi MASUI

This paper is part of a study of Asakawa Kan'ichi's diaries kept at Sterling Memorial Library( Manuscripts and Archives ) of Yale University.

When Asakawa died in 1948, the *New York Times* carried an obituary of 400 words, which became his first biographical note. The following year his alma mater, Waseda University, published a memorial issue of their journal, *Waseda Gakuho*, with four pages of essays on him. At around the same time in his hometown, Fukushima, many articles were published in local papers concerning the honors awarded to this eminent scholar. In 1953 his friends at Dartmouth College published a nine-page biographical essay in their alumni journal. These essays and memories of friends reveal Asakawa as a man, a historian, and an educator.

---

\*ますい・ゆきみ：敬愛大学国際学部助教授 アメリカ研究

Associate Professor of American Studies, Faculty of International Studies, Keiai University.

All of them were written after his death, but in this paper I deal with a diary written in 1915 by a Japanese doctor who lived in a New Haven apartment house with Asakawa for six months. Tanaka Fumio contributed many pages on Asakawa, who became his guide to life in the United States. Comparing this source with Asakawa's diaries of the time, I aim to challenge the stereotypical analysis of Asakawa as a lonely scholar.

Tanaka was not the only Japanese that Asakawa helped to become adjusted to their new environment. Together with their diaries, the list of members of the Yale Japanese Club locates Asakawa among the Japanese who studied at Yale and shows that he was deeply involved in their activities.

Asakawa's contribution as a cosmopolitan was not limited to Japanese in New Haven. He gave talks at international conventions and intellectual communities in various areas, published articles and book reviews in prestigious US journals, and sent letters and essays to Japan to stimulate Japanese intellectuals of his time.

## はじめに

人物伝は没後書かれることが殆どであり朝河貫一の場合も例外ではない。1948年8月11日、74歳にして生涯を終えた翌日、『ニューヨークタイムズ』(New York Times)は見出しを「イエール大学名誉教授朝河貫一逝く、享年77歳」<sup>(1)</sup>と、年齢の誤りを残したままではあるが、9段落から成る訃報記事を掲載した。朝河が36年間に亘りイエール大学の教壇に立ったこと、またダートマス大学でも教鞭を取ったという事実を小見出しに、二本松(福島県)に生まれ、早稲田大学卒業後留学し、博士に至るまでの学歴を紹介する。「傑出した法制史学者」と称え、代表著書に『大化の改新』(The Early Institutional Life of Japan)及び『日露の衝突』(The Russo-Japanese Conflict—Its Causes and Issues)を挙げる。そして最後に家族、つまり亡き妻ミリアムとの短い結婚生活に言及するという内容である。故国へはAP通信から配信され、8月13日『朝日新聞』、『毎日新聞』、『読売新聞』の3紙をはじめ、英字新聞『パ

シフィック・スターズ・アンド・ストライプス』( *Pacific Stars and Stripes* ) 及び『ニッポン・タイムズ』( *Nippon Times* ) 等に掲載された。各紙とも『ニュー・ヨークタイムズ』程大きな扱いではなかったが、「日本封建制度の権威」や「東洋史の権威」という文字は漏らさずに載せた<sup>(2)</sup>。

母校早稲田大学では翌年、『早稲田学報』10月号を「朝河貫一博士追悼号」とした。政経学部教授の小松芳喬、島田孝一を筆頭に、故人とは互いに尊敬しあっていた宗教学者姉崎正治、福島中学(現安積中学)時代からの友人竹内松治、早稲田大学後輩脇本本次郎、同じく後輩で執筆当時は第一文学部教授・図書館長であった岡村千曳が寄稿している。

小松は朝河を「国際的史学者」と位置づけ、その理由として、日本人研究者の外国語での出版物の少ない時代に、英文で論考を発表し、西洋の研究者に博士の著作が度々引用されることから明らかな通り、その権威を専門家により認められたという点、及び西欧と日本との比較法制史家として先駆者となった点を挙げる<sup>(3)</sup>。島田は日本の新聞が「浅川」と誤字で逝去を伝えた事実から、朝河の業績が日本に浸透していない現実を指摘する。と同時に地元福島では朝河博士顕彰運動が始まっていることを伝えている<sup>(4)</sup>。姉崎は朝河の個人的な側面を語り、先に逝った友を「学者的良心の実に鋭利な学者」であったと評す。講演依頼があっても、日本の利の為の協力を求められても、「自信と良心が許さなければ一言も一文も公けにできなかった」と、時にナショナリスト的ジャーナリストに批判されることもあった朝河の生き様を弁明する。アメリカを舞台にして世界の学界で認められた学者として自然科学に野口英世があるなら、人文科学は朝河であると二人を両翼に置き、ニューヨークの日本クラブで将棋をさす野口の姿を描写しながら彼を「社交の人」と呼び、死に際して日本では殆ど注目されなかった朝河を「孤独の学者」と呼ぶ<sup>(5)</sup>。朝河を福島時代から知る竹内は、優秀な苦学生としての側面を紹介しながら、それを支え続けた横井時雄、坪内逍遙、大西祝といった恩師にも言及する<sup>(6)</sup>。脇本は「朝河教授のアメリカ生活」と題し、ダートマス大学及びイエール大学での実績に加え、元同僚から聞いた寸暇を惜しんで研究に精を出す晩年の朝河の姿を伝える<sup>(7)</sup>。最後に岡村は

早稲田の後輩にとっては「あれがエールの朝河貫一だよ」と囁かれる程に憧れの対象であった思い出を語る。加えてアメリカで耳にした「朝河君は大変変わった人ですよ」という噂にも言及するが、スタンフォード大学では市橋（Yamato Ichihashi, 1878 - 1963年）に「実に立派な業績だ」と英文による朝河編『入来文書』（*The Documents of Iriki, 1929*）の存在を教えられたこと、イエール大学では朝河が日本史だけでなく、欧州中世史の研究者としても認められ、その研究室が関連書籍で埋まっていた点に言及しながら、時に周囲の反感を買った先輩を、それは「直言を憚らざる良心と勇氣」から来るものであったと擁護することを忘れない<sup>8)</sup>。

以上、早稲田大学関係者による朝河を偲ぶ記は、最終頁に著作一覧を掲載しながらその功績を称えているが、朝河の最初の留学先、ダートマス大学でも、同期卒業生ジョージ・クラーク（George Clark）が中心となって「朝河貫一伝」が執筆編集され、1953年6月、同窓会誌に掲載された。代表のクラークは福島県やイエール大学に朝河情報を求め、旧友たちからも思い出を文章に綴ってもらった。詳細に関しては拙稿「英文『朝河貫一伝』」<sup>9)</sup>を参照されたいが、ここには学者としての功績に加え、勤勉で実直な朝河の一面が紹介されている。

他にも、同年9月『毎日新聞』の学芸欄に掲載された角田柳作による「故・朝河貫一博士を思う」がある。角田も早稲田大学の出身だが、朝河との最初の出会いは坪内逍遙の教室であった。講義内容はシェークスピア劇『オセロ』で、角田は「紺ガスリの筒そで」姿の朝河を鮮明に覚えていると書く。二度目は朝河第一回帰国時であったが、この時朝河が成したイエール大学及び米国議会図書館に依頼された仕事を、アメリカによる最初の大掛かりな日本語図書収集として評価する。三度目は角田自身がイエール大学を訪ねた1917年のことで、「来客をことわり、人を避け、寸時を惜しんで研究に没頭され、まるで史壇の修道士、清教徒と同様な性格であった」と、研究に没頭する朝河の一面を挙げる。その後角田もコロンビア大学に勤め、朝河との交流は長きに亘ったようだが交換した手紙類は第二次世界大戦時の家宅搜索で紛失し、手元に残る手紙は、朝河がニューヨークの日

本クラブで講演をした時のもの、角田にイエール大学図書館の後任者の紹介を依頼したもの、角田が移民局に抑留中に届いた慰問の手紙2通、の合計4通のみであると記す<sup>(10)</sup>。

上記文章に残された朝河評の他に、私は、朝河と直に接した二人の人物から話を聞く機会に恵まれた。一人は日本研究者ドナルド・キーン (Donald Keene) 氏で、一人は朝河の教え子メリー・ラウス (Mary Rouse) さんである。1994年7月、キーン氏は、「恩師 角田柳作先生について」と題する講演の中で、朝河と角田の違いを次のように説明した。演題が示す通り、キーン氏は「先生と言えば角田のことでした」と弟子の育成に優れていたかつての恩師を称えた。一方朝河に関しては、優れた学者であったとしても弟子を育てていないと辛口評価である。そして、「先生」のコメントをなぞるが如く、角田の退職記念論集の執筆依頼に朝河を訪ねたところ、結局は断られたのであるが、本人が会ってくれたことに朝河の同僚たちが驚いたという私的体験を語った<sup>(11)</sup>。ラウスさんはイエール大学大学院で文化人類学を専攻した日系二世のアメリカ人である。1912年生まれで朝河とは39歳の年齢差がある。中国を研究対象にしていたこともあり、日本語だけでなく中国語も解し、朝河の図書館の仕事を手伝っていた。私は、朝河文書の中に朝河からメリーに宛てた手紙を見つけ、そして彼女が健在で、ニューヘイブンの郊外にイエール大学名誉教授である夫アーヴィング・ラウス博士 (Irving Rouse、文化人類学者) と暮らしていることを知った。そうして、1995年の夏、翌年春と2回、ラウスさんのお宅を訪ねたのである。この時のインタビューに関しては『朝河貫一研究会ニュース』第23号<sup>(12)</sup>に一部紹介してあるが、ラウスさんは朝河を「魅力的 (charming) な方であった」と懐かしみ、私が朝河研究のために彼女を訪問したのを非常に喜んでくれた。

以上はどれも朝河の亡き後、友人知人の思い出の中で語られたものである。しかし、本稿に於いては、朝河の存命中に著わされた朝河観を紹介したい。語り手は、兵庫県出身の医学者田中文男 (1883 - 1963年) である。田中は1915年から2年間、医学系官費留学生としてアメリカに送られた初期メンバーの一人であるが、最初の半年をイエール大学で過ごし、朝河と同

じ下宿に住まう。朝河は日々日記を付けるのを習慣としていたが、田中も同様であった。そして田中は、後にこれを自費出版している。本書に登場する朝河には、没後語られた朝河像とは違い、人生が完結していない分の面白みが存在する。当時の朝河の姿がそこにあるわけだが、朝河本人の日記や手紙<sup>(13)</sup>と併せ読みつつ事実関係を検証しながら、未だ十分に掘り起こされているとは言いがたい人物朝河の新たな一面を見いだすことを目的とする。

次に、朝河の日記と共にイエール大学の「朝河文書」(Asakawa Papers)に収められている「エール大学日本人学生名簿」<sup>(14)</sup>を基に、明治及び大正期におけるイエール大学日本人留学事情について言及する。朝河を、イエール大学を学舎とした明治大正期の留学生の中に置くことにより、在米日本人としての位置を新たに捉え直すためである。

そして最後に、明治末から大正にかけての朝河の日記、手紙、出版物等を分析しながら、在米日本人研究者としての朝河の「役割」についての考察を試みる。本稿は、朝河貫一個人史研究の一端となることを願うものであるが、人間関係から見えてくる人物像だけではなく、朝河が時代とどのように関わっていたかにも言及する必要があると考えるからである。

## ・田中文男の「朝河さん」

### 文部省医学留学：アメリカ第1号

田中文男がアメリカに渡ったのは1915年5月のことであった。ヨーロッパは第一次世界大戦の真只中で、日本からの留学生はアメリカへと方向転換せざるを得なくなった。当時医学の中心はドイツであり、田中自身は半年もすれば戦争も終結し、ヨーロッパに向かうことになるかと考えていた。しかしその兆しはなく、やむを得ずアメリカに留まることになる。最初の半年をニューヘイブン、続く1年半をボストンで過ごす。

田中の記述を『日本帝国文部省年報』で確認してみると、この世界大戦

の影響はより明確になる。1914年度、留学生派遣国はヨーロッパからアメリカへとシフトしている。「文部省外國留學生研究學科及留學國別」の表は、「留學國」「研究學科」別人数を示すものであるが、「留學國」に関しては、1国の場合もあれば派遣期間内で複数の国に滞在する場合もあるので、1国に何名いたかという調査は難しい。しかし、ドイツのみに派遣された人数、アメリカ合衆国のみに派遣された人数というのは挙げられる。1913年度の派遣総数40名の内ドイツが10名を占める。アメリカ合衆国のみという派遣はない。翌1914年度報告になると派遣総数は33名となり、ドイツのみというものは消え、30名がアメリカのみの留学生となる<sup>(15)</sup>。田中はその内の一人であった。

田中はアメリカで学んだ公費医学留学生としては自分たちが最初であったと記しているが、「大正六年三月三十一日調、文部省外國留學生表」(文部省専門學務局)によると、柿内三郎(1882 - 1967年)及び尾崎良胤も同じ年度の派遣である。柿内は「東京帝國大學醫科大學助教授 醫學士」<sup>(16)</sup>、尾崎は「京都帝國大學醫科大學助教授 醫學士」<sup>(17)</sup>、そして田中は「岡山醫學專門學校教授 醫學士」となっている<sup>(18)</sup>。

## 朝河に会う

1935年10月、田中文男は岡山医学専門学校教授赴任から25周年を記念して『北米日記通信』を出版した。1915年5月、官費留学生としてアメリカに渡り、医学研究者として2年余を過ごす間、母親に送り続けた便り(日記)を纏めたものである。

本書は「ニューヘブン時代」、「ボストン時代」、「帰途」、「付録」の4章から成るが、第1章の「ニューヘブン時代」に朝河貫一が幾度となく登場する。前述したように、これまで朝河について語られたものは没後のものが殆どであった。朝河を知るひとは、思い出の中で故人を偲ぶわけだが、田中文男が母親に伝えた朝河は、32歳の医学留学生のその時の感想であり観察である。朝河は42歳であった。

「母上様 五月十八日夜 ニューヘブンにて 文男拜」<sup>(19)</sup>で始まる最初の

手紙は、アメリカ到着の無事を知らせるものであるが、早速朝河の名前が登場してくる。「文科の助教授に朝河と云う日本人あり、兎に角第一にこの朝河さんに面會する方都合良ろしからんと注意いたし呉れ候人有之候につき、全く私の知らぬ人に候へ共、あらかじめ手紙を差出申候て、昨日尾崎君と共に紐育より到着、直ちに朝河氏を訪問致候處、非常に深切に御世話被下、早速下宿もきまり、本日此宿に引越し申し、日本出立以来、はじめて目的地に到着したと云う氣分に相成申候」<sup>20)</sup>とあり、新しい海外生活での水先案内人が朝河であったことが伺える。

田中はシアトルで下船すると、大陸横断鉄道で4日間かけニューヨークに向かう。尾崎良胤及び京大工科助教授の濱部源次郎が同行者であった。ニューヨークでは日本クラブを宿にし、数日間休息をすることにしたが、果してここで初めて朝河の名前を耳にするのである。「この方も知らない人ありますが我々の先輩であるとの考への下に、自己紹介の手紙を出し面會を乞ひました處、十七日の午前十一時から十二時迄の間に圖書館に来て呉れその他は『時間無之候。致方無之候』との返事が参りました。仲々嚴重な返事ではありますが、これが米國の風習でありませうか」<sup>21)</sup>と緊張しながらではあるが、尾崎と二人で朝河を訪ねることになる。

初対面の感想は「温厚らしい人」<sup>22)</sup>と記されている。ニューヨークで受け取った返事に表れた厳しさとは対照的に、朝河は昼食でもてなし、自分の下宿先に連絡を入れ、翌日から使えるように交渉してくれたのである。

## マンスフィールド通り166番地

朝河は妻を亡くして半年後の1913年8月20日、この住所に引越して来ている。ミリアム亡き後のアパート(パーク通り228番地)は、今や広すぎた。仕事の合間に遺品の整理をしながら、一人暮らしに程よい住まいを探し始めた。学期中は授業の準備や図書館の仕事、そして講演などで余裕がなかったが、夏の休暇をニューハンプシャーで過ごす時、例年よりも早めの8月1日にニューヘイブンに戻ってくる。そして早速アパート探しに取りかかる。不動産屋を回れば、新聞にも広告を出す。告知内容は、「男性一人、



空き部屋求む。部屋数2乃至3、家具付きは問わず、浴室の側が望ましい。8月25日以降より。住所はパーク通り228番地、K. A. <sup>(23)</sup> というものであったが、これには十分な数の反響があった。朝河は4日から8日の間に少なくとも8人の家主と会っている。そして最終的には最後に訪ねたマンスフィールド通り166番地(166 Mansfield Street)のドネリー(Donnely)宅に決めるのである。下宿代は賄い付きで月50ドル。夏期の留守中は3分の2と交渉し、ドネリー氏はこの条件を呑む。1913年のドルの価値は、今日のそれと比較すると約18倍であった<sup>(24)</sup>。

ダグラス・W・レイ(Douglas W. Rae)の報告によると、イエール大学の教授陣の住んでいた地域はある程度限られていたという。レイは1913年の正教授131名の住居を調査した。そのうち114名がニューヘイブンの住所で、詳細は87名がイーストロック地域、14名がダウントウンのグリーン周辺、13名がドワイト区であった。つまり81パーセントの正教授がキャンパスから1マイル(1.6km)以内に住んでいた<sup>(25)</sup>。何回か引越しをした朝河ではあるが、多くの教員たちと同様、住処は常にキャンパス周辺を選んだ。

書簡、日記、ゲストブックに残された朝河の記述を整理すると、大学院時代の住所はパーク通り105番地であった。結婚してからはエルム通り870番地が二人の最初の住まいとなり、後にパーク通り228番地のアパートに移っている。そして、次がこのマンスフィールド通り166番地である<sup>(26)</sup>。1913年8月20日、朝河は9つの本棚、18個の仕切りケース、44箱の本、8脚の椅子などを2台のワゴンに積み込み、ミリアムとの思い出がつまったアパートを後にすることになる。

朝河の日記は、控えとして書き写した手紙を除いてはその日の出来事の記録であり、誰かに宛てたものではない。一方、田中の日記は日本の母親に読んでもらうことを意図したものであり、詳細な記述が為されている。日記を書く時だけが、異国にいる寂しさを紛らわすことができたと序に記してあるように<sup>(27)</sup>、息子から母への誠実な語りとなっている。できるだけ正確に伝えたいと思ったのであろう。朝河の日記にはない住まいの様子やドネリーの家族について、またニューヘイブンの街の様子などが詳しく描写

されている。

建物に関しては、次のような記述がある。「家は木造であるが、仲々美しく、周圍に僅か乍ら芝生の空地があり、先ず別荘風と云つた形です。此家が二軒に分れ、一階は他の家族に借し、二階と三階が私達の家で、尾崎君は二階ですが、私の室は三階で、まあ屋根裏とも云ふ可き處であります」<sup>28)</sup>。そして屋内は、「此二階と三階が中々廣くて、應接間、食堂、湯殿兼便所、家婦の室、臺所などが二階にあり、三階に朝河氏の室と私の室、浴室等があります。尾崎君の室だけ二階の一隅にあります」<sup>29)</sup>となる。

レイの調査が示す通り、イェール大学関係者の住む地域はだいたい決まっていたとはいえ、経済的には大きなばらつきがあったようである。田中の指摘によると、「私の住んで居ります所は東京で云へば山の手とも云うべき處ですが、住んで居る人は先ず中流らしいです。或は下流の上の部と云つた所かも知れません。つまり高級職工や、上等の園丁とかまあさう云う階級の人々が住んで居るらしいのですが、それでも家庭を見ると大抵の家はピアノを備へ、應接間なんか中々相當に裝飾して居ります」<sup>30)</sup>とある。大家のドネリー氏はアイルランド系の移民で仕事は鉄道関係に勤める職工ということなので、労働者階級に属する。1913年当時ニューヘイブンの労働者階級の収入は月額60ドルあれば良い方だった<sup>31)</sup>ということであるから、ドネリー家の家賃収入は夫の月収をはるかにしのいでいたことが伺える。

田中は、文部省から月額75ドルを支給されていたが、1週につき部屋代3ドル食事代7ドルの計10ドルで契約を結ぶ。つまり収入の半分以上が下宿代であったわけだが、その3分の2が食事代となっている。では、どのようなものが食卓に並んでいたのであろうか。田中は1日の食事内容を次のように伝えている。

「朝。(1)メロン、(2)オートミール、(3)ハムエツグ(卵は一箇ハム二片)、(4)トースト二片、(5)氷及茶。

晝。(1)スープ、(2)肉(かなり澤山)とつぶし馬鈴薯、(3)豌豆(皿に一盛)、(4)フランスパン、(5)ビスケット、(6)カステラに苺をのせ、ミルクをかけたもの、(7)氷水、茶又はミルク。(これで腹一杯です)

夕。(1)冷肉小三片、(2)パン、(3)パイナップル、(4)氷水、茶<sup>32)</sup>。

顕微鏡で研究を続ける医学者らしく、具体的な記述である。ドネリーの家族一人ひとりについての描写も、田中の日記の方がはるかに詳しい。朝河は例えば「8月24日、ドネリーの家族と最初の食事である」とか、妻の一周忌の夜「ミセス・ドネリーがホット・ミルクを運んでくる。亡き妻ミリアムの話をする」と、特筆すべき日のでき事のみを簡単に書き留めただけだが、田中の筆を通すとその家族の肖像が浮かびあがってくる。ドネリー一家は夫が50歳位で妻は10歳程若い。夫はあまり知的とは言えないが風貌は堂々としていて日本人の目には市長か学長のように見えると印象的に描く。妻の方は、「鷺鳥の様に白く肥った、體格の大きい顔の丸い、強い近眼の鼻眼鏡をかけた、割合に上品らしい女」と写實的描写をとる。そして「中々ぬけ目のない、相當人がよくないと私は鑑定しております<sup>33)</sup>と、表現主義者のように感情を表す。田中はたまにこの家族と一緒に散歩をしたが、二人の娘が加わることもあった。夫婦にとっては自慢の娘らしく、上はあと1年で女学校を卒業し、さらに2年間師範学校に行つて教員になり、下は翌年女学校に入るという話を聞かされる。たまに階下からピアノの音が聞こえてくるが、この二人の演奏である。

この家族の朝河観に関しては、「おかみさんは口癖の様に Prof. Asakawa is very nice gentleman と云っております」とある。娘の方は、「タナキアさん、昨夜はねむれましたか」と聞いてくる愛想の良いお嬢さんではあるが、朝河の君子ぶりには近づきたいものを感じるのか「うちとけて話などはしない」と打ち明けている<sup>34)</sup>。

田中の日記には他の日本人留学生の名前も登場するが、朝河に関する話が最も詳しい。最初の長い報告は1915年5月28日、同居人になってから10日目のものである。「此方は年は四十二三に見える、小柄の引きしまつた温和な顔の人です。朝は七時半に冷水浴をして、八時からの朝食を済ますとすぐ大学に行き、晝はキチンと一時に歸つて中食を攝り、又すぐ出かけて五時に歸つて來られます。私達との夕食がすめば冗談などは少しも言はず、さつさと自分の室へ引取つて十時には寝ると云つた具合です<sup>35)</sup>と朝河の

規則正しい生活ぶりが伺える。朝河の日記には、1911年6月、1週間のスケジュール表<sup>(36)</sup>が添えられているが、田中の記述と矛盾しない。冷水浴に関してはスケジュール表には書かれていないが、朝河の美学と矛盾しない。

田中は「英語も餘程上手なのでせう」<sup>(37)</sup>とか「大分長らくこちらに居られるらしいです」<sup>(38)</sup>とか直接本人とはあまり話をしていないらしい様子である。それもそのはず、朝河は、英語で話すべし、というルールを新しい住人に課したのであった。「この宿に、朝河さんと、尾崎君と私と三人が、朝晝夕三回食卓を同じくして居りますが、食卓では日本語を使用す可からずと云ふ朝河さんの發議で、究屈なる事夥しく、實際これでは食物が消化しない……辛棒して居る次第です」<sup>(39)</sup>とアメリカ生活の始まりにあたっての困惑について記す。しかし田中自身の初期の目的は論文の完成と英語会話の上達であったので、その後者のためには仕方がないという思いもあったようである。さらに言えば、このような厳しい形ではありますが英語の上達のために協力してくれる日本人先輩がいますので母上さまご安心下され、という報告であるとも読める。

家主をはじめアメリカ人に尊敬されている日本人が側にいることに誇りを感じつつも、人を寄せ付けない厳しさには馴染めない部分もあった。しかし、田中は朝河の留守に彼の蔵書を捲りながら、徐々に、その人となりを理解していくようになる。

## 朝河観の変化

田中が朝河と同じ下宿人になってまだ半月程しか経たないうちに、朝河は欧州へと旅立って行った。田中は「6月4日 金曜 午前九時四十一分の汽車で朝河さんが欧州に出立されますので、停車場まで見送りました。流石になつかしい気がしました」<sup>(40)</sup>と記し、朝河も同日同様の内容“June 4, F. Fine. Take the 9. 41, Tanaka & Ozaki seeing me off at dept”と書き留める。

大学はもう長い夏期休暇に入っている。朝河が出発した翌週の土曜日、田中が自室で勉強していたらドネリー夫人がノックをする。この部屋は暑いし、これから掃除するので朝河の部屋で勉強するよと言う。たとえ留

守ではあっても他人の部屋は使えないと躊躇していたら、帰るまで自由に使って良いとの言いおきがあるとのことだ。田中はその好意を有難く受け入れることにした<sup>(41)</sup>。

先に挙げた朝河の引越し荷物からすると、44箱の書籍の詰まった9つの本棚が置かれた学者の部屋である。田中の視線は、自ずとその蔵書に向かった。そして(1)「英語での出版物」、(2)「日本の禍機」、(3)「新聞に掲載されたものの「別刷」、の3点を手に取る。そして「別刷」の要旨をまとめ、母親に送るのである。少々長いが、そのまま引用したい。

「初めの八、九年は本務の餘暇、日本のためにと時事問題に就て発表した  
が、其後思ふ處あつてやめにした。其理由は、他に本職の人が出来たためと且、どうも時事問題を論じて日本の為にするには、時に眞理に戻る様な事のある気がする、且又自分の柄でないと思つたからである。それで自分は其後日本の事に関して、無関係になつた。そして一生を眞理の探求に委ねる。眞理の一頁は假令現世に認められずとも、萬世の後、光を放つてであろう。外國に在つて日本社会史の眞理を探求する事は、多少不便なきに非ず。然れども、独立独歩、公明なる判断は其缺を補ふて余りあり。勿論其事業の、日本の学者又は当局に認めらるるを期する勿れ。日本に其非人無し。認めらるるは却つて恥辱なり。嗚呼、誰れか共に如斯精神を以て眞理に生きる者なきや」<sup>(42)</sup>。

これは、在外研究者として朝河が選択した生き方をより端的に表している。田中は本棚から抜きとった朝河の著作の中にそのアイデンティティーを見いだしたのだった。「私は之を讀んですつかり朝河さんの凡てが明らかになつた氣がいたしました」<sup>(43)</sup>と記す。本稿の初めに言及した、友人姉崎や後輩岡村の追悼文に見られる朝河擁護の姿勢と通じるもの、つまり他者への純粋な敬意の念が読み取れる。旅立つ前に朝河が残していったアメリカの風習に関する本、及びそれに添えられた「訪問又は食卓禮儀に就て讀め。日本人來つて遂に此等を心得ずして去る。其惡印象を殘す事大なり」<sup>(44)</sup>というメモに対しては、「私達は日本人である。米國人にならうと云ふのではない」<sup>(45)</sup>と反発を感じたが、これをきっかけに朝河の姿勢が至極當然で

あると考えるようになっていく。

朝河が留守の間、主のいない部屋は、田中にとって自室の暑さから逃れる心地よい避難所になった。6月19日の日記にも「朝河さんの室で」という文字がある。この日は蔵書の中の「甲子夜話」に目がいった。そして蒸し暑い午後、日本では関心を示すことのなかったものを読む自分に矛盾を感じるのである。田中の部屋は南向きだったが、朝河の部屋は東に窓があったため午後は比較的涼しかったという<sup>(46)</sup>。

### 「日本政府館」と留学生

田中の日記通信は、7月の半ばから10月の半ばまで、しばらく中断するが、その間、ドネリーの家には、三人の日本人研究者が加わっていた。この建物の一階部分に住んでいた家族が出て部屋が空き、田中はドネリー夫人から日本人の借り手を紹介して欲しいと依頼される。そうして、医学者の柿内三郎、天文学者の平山清次（1874 - 1943年）、盛岡高等農林（現岩手大学農学部）教授の村松舜祐がマンズフィールド通り164番地の住人となる<sup>(47)</sup>。同建物の1階部分に本住所、2、3階部分に166番地の番号がついていた、との説明があるが、こういった住居表示の建物は2006年現在でもニューヘイブンの街には数多く見られる。

9月30日、朝河が3カ月の欧州旅行から戻ってくると、ドネリー邸の間借り人は全員日本人ということになっていた。ドネリー夫妻はこれを「日本政府館（Japanese government house）」と呼んだ<sup>(48)</sup>。田中にはぎやかになった「日本政府館」を「小生等來着當時に比すれば愉快此上無此候」<sup>(49)</sup>と書き記す。また朝河もこの状況を喜んだであろうことは、日記に登場する彼らの名前が物語る。

下宿での食事は朝昼晩ドネリーの家族と一緒に全員が集まるわけだが、欧州旅行の写真が現像されてくるとそれを見せたりしながらそれぞれの夏の話で沸くわけである。「食卓では英語」はまだ誰もが守っていた。しかし、各人部屋に戻れば日本語での会話になったようで、英語上達の目的は薄れたが、精神的には安らぎとなったと田中は告白している。田中は「今より

も六、七月頃の方がよく話せた様に思ひます<sup>50)</sup>という反省と共に「殊に此頃は度々平山君柿内君等と一緒に掛けて出して愉快です<sup>51)</sup>と明るいニュースを伝える。また朝河の日記には、食卓での笑いの提供者として柿内の名前が挙げられる。例えば、「食事中にみんなが柿内とふざける。彼は心が良い」とか「食事の時、私たちはいつも柿内をからかっている」といった具合である。また、柿内が胃痛で苦しんでいた時のことも記しているが、「赤ん坊のようだ」と、苦笑しながら書いたのではないかと思われるような表現である。「日本政府館」の住人たちは、知的交流も怠らなかつた。田中が夏の間、朝河の著作を読んだことは前述の通りであるが、朝河の日記には、平山が天文学に関する論文を持ってきたとの記述もある。

さてこの年の秋、日本は即位の礼に沸いていた。ニューヘイブンに住む日本人の間でも、祝賀会をどのように開くかが話題となっていた。田中も朝河もこれを日記に残しているが、双方を比較しながら紹介したい。田中は、イェールで研究する日本人留学生在が日本茶店で祝賀会をすると決まったが、各人が襟に菊の花をつけるべきであり、学校も休むべきだという者もあれば、個人の自由で良いという者もあったと記す<sup>52)</sup>。一方朝河の日記は、10月22日「奥村に手紙を書く。11月10日の即位の礼の祝宴の招待状である」と事務的な内容の記録だ。朝河は主催者側にいたのであろう。情報が交錯していたのか11月5日の日記には「柿内は誤解していた」とか「大島に連絡を入れた」といった記述も見られる。

そしていよいよ11月10日であるが、朝河の日記をそのまま翻訳してみよう。

「本日は即位の礼である。日本人学生は5時半に出発し日の出を見ようとイーストロックに向かった。それから、車でブランフォードに行く。私は図書館の仕事があったので同行できなかった。しかし、午後田代に日本人全員が集まり、ベーコン女史 (Alice Bacon, 1858 - 1918年) もゲストとして出席した。司会役は大島で、平山、瀬川、私がそれぞれスピーチをした。食事の方は私が幹事をつとめていたのであるが、皆に吸い物をすすめた。写真 (欧州旅行の写真だと思われる) を持っていったので何人か

に見せた。」

同じイベントも田中の筆によると次のようになる。田中は翌日書いているので11月11日付である。

「昨日は日本では御即位式。此方でも主として留學生連と、エール大学に学んで居る日本の学生連中と一緒に、イーストロックに上つて日の出を拝し、天皇陛下萬歳、日本帝国萬歳、合衆國萬歳を唱えました。これが六時半。八時から自動車二台に分乗して、せめて日本に連なる水のほとりと東の方の海岸へ馳せ、帰りは各々徒歩で十一時頃宿に帰りました。

一時から日本茶店で一同会食。総てで十六人。中にはミス・ベーコンと云ふ米人のお婆さんも交じつて居ります。(中略)此ミスの家に寄寓して居る一柳と云ふ、三十歳位の女の人も列席しました。朝河さんも同席。日本國歌を合唱したのち一同嬉々として談笑。然し、楽しんで居た日本料理は誠に貧弱なものでしたが、でも赤飯がありました。學生の会費五十仙、留學生一弗。アルコールは一切なしです。五時頃帰宅しました<sup>(53)</sup>。

朝河が幹事であるならば酒類がないのも納得できよう。欧州旅行に旅立つ前に西洋のマナーについての本を田中と尾崎に残したということは前に触れたが、まだピューリタンの名残のあるニューイングランドの地では、飲酒はタブーとされていたのである。これは田中にとっては非常にかた苦しい掟であったようで、母国へ報告すべきアメリカの特徴の一つとなった。モラルや習慣がこれまでと変わり、その違いに神経をすり減らしながら生きている様子がひしひしと伝わってくる描写が多々見られるが、「酒文化」の違いに大きなショックを受けたのは、ニューヘイブンの最初の日曜日であった。

さて休日だと、田中は街に出てみる。広場では牧師が説教をしている。田中の目的はアルコールを求めてである。不眠症の問題があり、酒の力が必要だった。しかし入った日本料理屋では飲酒はできないと言われ、カフェといえば甘いものしかメニューにない。酒場を求めて2時間歩いたけれど、ドアが閉ざされていたせいか全く目に入らず、そのうち、飲食店はどこも夕方6時で閉まってしまった。やっと1軒開いていた薬局を見つけ入ってみ



ると、果して棚にウイスキーを見つけたのだが、日曜日は売れないという。それでも月曜日には手に入れられると思うと元気になり、午後9時半に宿に帰ったということである。勿論、翌日入手し、睡眠不足も解消されたと書き記している<sup>(54)</sup>。

また、東京から教授を迎えた時の話も、歓迎会の飲み物は水だけであったとある。これは滞米半年程経ってからのコメントであるが、「飲酒を罪悪の様におもはれ勝ちに候此國で、殊に小さきニューベブン [ ママ ] の如き大學町で、日本人が酒を飲み申候へば尚更目立ち申候故、しいてほしいと思ひ申さざる事に御座候」<sup>(55)</sup>と、ニューヘイブンに着いたばかりの頃の意識とは随分変わっていることが伺える。当初は朝河に対して「よく斯の如き乾燥なる生活に堪え得ることと御氣毒に思はれます」<sup>(56)</sup>と感じていたわけだが、半年間のニューイングランドの生活で田中自身、土地の習慣を受け入れるようになっていったということであろう。

こうして田中は紅葉も終わりかけた頃、次の研究先であるボストンに超越して行くのである。最初の留学生活に最も大きな影響力を及ぼしたのは朝河貫一であった。11月25日、朝河は田中及びやはりボストンに向かう柿内のために送別会を開いている。

翌日、田中は世話になった御礼にと朝河の元にネクタイ・ピンを持って挨拶に来る。そして、27日の土曜日、寝食を共にした「日本政府館」の留学生と水先案内人であった朝河に見送られ、ボストンへと旅立って行く。朝河は、「柿内と田中が10時20分の列車でボストンに発つ。何人かの日本人の見送りがあった。ふたりにキャンディーを贈り、田中にはモースへの紹介状を渡した」と記し、田中は「停車場には留學生全体（平山、尾崎、村松諸氏）及びエール在學生二名（瀬川、大島二君）及び朝河さんの見送りを受けました。朝河さんは私に汽車の中で食べる様にとキャンディーを贈られ、又ボストンの博物館長モース教授への紹介状を渡されました。去るに臨んで感謝の意を表します」<sup>(57)</sup>と締めくくっている。

## ． イェール大学留学生：明治・大正期

### 「イェール大学日本人学生名簿」<sup>(58)</sup>が語る留学状況

田中及び朝河の日記から、イェール大学の日本人留学生が定期的に集まっていたこと、また朝河が各催しや行事の中心的役割を担っていたことが明らかになってきたが、イェール大学と日本の繋がりは長い。「朝河文書」の中に、第1ページ目に墨字で「イェール日本人會」「イェール大学日本学生名簿」と書かれた資料が残されている。えんじ色の革表紙で製本された394頁から成る厚い名簿であるが、記入は146頁、「東京帝國大學醫學部」の山口正義（1936年イェール入学）で終わっている。それ以降の日本人留学生に関しては他の名簿が存在するのかもしれないが、朝河が管理していたのはこの年までであったと考えられる。

さて、本名簿を最初から眺めると、縦に年度を、横に専門分野をとり、1870年度から1914年度までにイェール大学に留学していた日本人学生の人数の内訳が記された表が添付されている。専門分野は「経済 (Economics)」から始まり、「社会科学 (Social Science)」「政治学 (Political Science)」「法学 (Law)」「医学 (Medicine)」「神学 (Theology)」「哲学 (Philosophy)」「英文学 (English)」「言語学 (Languages)」「歴史学 (History)」「美術 (Fine Arts)」「数学 (Mathematics)」「化学 (Chemistry)」「工学 (Engineering)」「鉱山学 (Mining)」「森林学 (Forestry)」「生物学 (Biology)」「音楽 (Music)」の順で並び、これに「不明及びその他」の覧が一つ追加されている。学部生 (Academic Undergrad. 及び Sheffield Undergrad.) はこの欄に入れられている。この表から日本人留学生の勉学の傾向が見えてくる。

名簿の個人情報に関しては、何度か変化を見せるが、だいたい留学生の名前、出身県、入学年、帰国年、専攻、住所が記載されている。最初の日本人留学生は、鹿児島県出身の大原礼之助で法学専攻、1870年から71年までの滞在となっている。次は1872年入学の津田眞道と山川健次郎で、津田

は美術専攻、山川は工学専攻である。山川は75年まで在籍し、学士号を取得し、イエール大学日本人卒業生第1号となる。二人目の卒業生には1878年に鹿児島県出身の田尻稲次郎の名前がある。山川は理系であったが、田尻は文系に所属し、学部を終えるとさらに大学院へと進み法学を専攻した。

1886年から97年までは法学部への入学者数が最も多いが、1890年代中頃からは「神学」、「哲学」、「経済学」の専攻者が増えてくる。朝河が大学院に歴史学専攻で入学した99年度は、他に経済学2名、法学1名、神学2名、哲学1名、化学1名の日本人留学生が入ってきた。朝河はイエール大学に於ける歴史学専攻の最初の日本人であった。ペリーの通訳として黒船で日本にやって来たサミュエル・ウィリアムズ (Samuel Williams) は日本史に名を残しているが、朝河はその息子、フレデリック・ウィリアムズ (Frederic Williams) を指導教官の一人として、ここで学究生活に入る。経済学専攻の木下英太郎は朝河と同様、学部生活をアメリカで過ごしている。同じく経済学専攻の松本宗吾は慶應義塾大学出身である。法学専攻は長崎出身の林貞次郎、神学は関西学院大学出身の松本益吉及び牧野通次、哲学及び化学は夫々同志社大学出身の河辺治六と中瀬古六郎であった。

1870年度から1899年度までの日本人入学者を延べ数で表すと81名になる。この数は朝河が博士号を取得した1902年までには99名となっていた。尚、本表が作成されたのは1907年という記述があるが、それは朝河がイエール大学で教鞭をとり始めた最初の年でもある。その時までにはイエール大学に籍を置いた日本人の数はすでに150名を超えていた。1年も経たずに帰って行く者、学位をとるまで残る者と滞在年数は様々だが、常に一定数の日本人留学生がここで研究していたことが分かる。

田中文男が所属することになる医学部の方は、1882年度に1名、85年度に1名、そして1908年度に1名と、1914年までわずかに3名のみであったが、前述した通り、日本人医学者の主な留学先はドイツだったのである。1915年にここを研究の場所とした田中も朝河同様、彼の分野に於いてはアメリカ留学先駆者の一人であったということになる。

## 「エール日本人會」について

朝河も田中も、日本の祝日には日本料理屋に日本人学生が集まったと記録に残しているが、多くが「エール日本人會」の主催であったと考えられる。そして、日本人学生が二つの附則を加えて15条から成る会則に基づいて行動していたことが、名簿の後半に添付された日本語及び英語による資料から伺える。

本資料は、1907年度朝河がエールで教え始めた頃に作成されたもので、会長佐伯矩（1876 - 1959年）及び二人の幹事（駿田、高橋）の1908年2月11日付の署名入りである。会員として朝河、稲岡、小柴、関戸、井上、川中、岡本といった名前が加わる。「本會をエール日本人會と稱す」を第1条に、第2条では「道德」及び「智識」の向上、第3条は「品行活動」を挙げ、第4条では「會長一名、幹事三名」という役員定数、第5、6条では会長及び幹事の役割、第7、8条は会長及び幹事の任期（1年／半年）及び選挙に関する条項であり、第9、10条は議決に関する決まり（開会には3分の2が、議決には出席者の半数が必要）を記載している。第11条は会長不在時の幹事の義務について、第12条は会則の修正及び付加に必要な人数（会員の3分の2）、第13条は制裁について、となっている。

これに二つの附則が加えられるが、その第1条は通常集会について、第2条は集会を欠席する場合の義務についてである。次に挙げる通常集会を見れば、エール日本人會の主な活動は、この附則にあることが分かる。まず新学期は、(1)10月第1土曜日の新入生歓迎会から始まる。次に、(2)天長節〔天皇誕生日〕祝賀会、年が明けて、(3)1月第2土曜日の新年会、(4)紀元節祝賀会、そして、(5)6月第2土曜日の送別会、という年間5回の集会の基本であるが、「右之外諸種の臨時會は會長何時にても召集する事を得」という但し書きを入れるのも忘れていない。前述の朝河、田中、両日記に表われた1915年11月10日の即位の礼の祝賀会は、この但し書きによって召集されたものだと考えられる。

本名簿は何人かの手により作られたものであることが、個性ある筆跡の

数々から伺えるが、初期の留学生（1898年迄）に関しては、朝河が整理したものだと考えられる。また朝河の筆跡による「死亡」や「退学」といった後に付け加えられた文字は、朝河がその人物と何らかの形で交際が続いていたのであろうことを示している。この会が発足した1907年度からこの名簿の終わる1936年度まで、100名を上回る数の留学生がニューヘイブンで研究生生活を送っていたわけだが、大学院時代及び1937年以降に入学した者を加えると、朝河が接した可能性のある日本人学生の数は少なめに見ても150人を超えていたと思われる。つまり朝河は、イエールの日本人について最も語ることのできる人物であったわけだ。

朝河の日記によると、1914年の1月12日、ストークス（Anson Phelps Stokes）事務局長に依頼を受け、イエール大学で学んだ著名な日本人に関する略歴を作成する。朝河が選んだのは、山川健次郎、田尻稲次郎、鳩山和夫、岡部長職、大久保利武、原田助、市原盛弘、木村駿吉、大原礼之助の9名であった。この朝河による調査は、日付から、同年7月にイエール大学出版から出されたイエール大学学校史『傑出したイエール・メンを記念して』（*Memorial of Eminent Yale Men*）<sup>59)</sup>の資料となったと考えられる。

本書は2冊から成り、タイトルの示す通り、傑出したイエール大学卒業生の記録である。18世紀及び19世紀の彼らの経歴がその中心となっているが、宗教家、作家、教育者、学者、科学者、発明・芸術家、政治家、法律家、軍人の順の章立てである。日本人の名前は「イエール大学卒業生の全国的な影響力」と題した付録に登場する。

アメリカ国内の卒業生に関しては1910年現在、代議士62名、閣僚20名、大使・大臣28名、州知事或は州の最高裁判事150名、大学学長162名という数を挙げ、イエール大学卒業生の活躍を示しているが、これは国内にとどまらず、極東に於いても卒業生の活躍が見られるという報告と共に、中国人5名、日本人3名、そしてシャムの卒業生1名の氏名、卒業年、職業が挙げられている。朝河の与えた情報はかなり削られたと考えられるが、3名の日本人に関しては、「田尻稲次郎子爵（学士1878年）会計検査院長：鳩山和夫（法学修士1878年）衆議院議長：岡部長職子爵（1882年卒生）法務大臣」<sup>60)</sup>

となっている。

## ・日本人研究者としての朝河の「役割」

田中の『北米日記通信』からも、また朝河自身の日記からも、イエールの日本人研究者と頻りに交流する朝河の姿が明確になってくるが、朝河の仕事はイエール大学だけにとどまるものではなかった。出版社、新聞社、大学、学会から、記事や講演の依頼が入ってきていたのである。以下では朝河の日記の他、本人が残した雑誌の切り抜きやパンフレットを資料に、「役割」という観点から学者朝河の側面を見ていきたい。但し、扱う時代に関しては、田中と朝河が出会う以前のものである。

田中が朝河の書籍から抜き取った「別刷」に、時事問題を論じるのは控え「一生を真理の探究に委ねる」という決意が書かれていたと先に述べたが、ここに紹介する1912年の論文（口頭発表は1911年）及び13年の記事を書いたのはその頃であったと思われる。田中の見つけた「別刷」と内容を同じくする文面が、1912年3月12日付け坪内雄蔵（逍遙）宛て手紙の控にも見いだせるが、そこには、時事問題は新渡戸稲造、本田増次郎、河上清、家永豊吉らに任せ、自分は学問に専念したいとする旨が切々と述べられている<sup>(61)</sup>。

詳細に入る前に「役割」と強調した理由を述べることにする。朝河哲学には“service”という概念がある。朝河の時代に於いては「奉仕」と訳すことは可能であったかもしれないが、「ボランティア」と「奉仕」の区別が為される今日の言語感覚の中では「奉仕」という訳語でその思想を十分に伝えることはできない。朝河が思想的影響を受けたキリスト教的「神に仕える心」を実社会に当てはめ「世界に役に立つ心」とでも訳したら良いかもしれない。ここで用いた「役割」にはこの意味が含まれていることを付け加えておく。

## クラーク大学での講演

1911年11月22日から25日までの日程でクラーク大学（Clark University）に於いて、「日本及び日米関係」と題した大会が開催された。クラーク大学はマサチューセッツ州ウスターにあり、1887年に設立された研究機関であったが、20世紀の初めに世界的な関心を集めたジークムント・フロイド（Sigmund Freud, 1856 - 1939年）が精神分析をアメリカに紹介した最初の場所として知られている。

水曜日の午前10時半にクラーク大学理事長ブロック（Colonel A. George Bullock）氏の歓迎挨拶で幕を開けると、朝、昼、夜のセッションが4日間、隙間のないスケジュールで進行していく。日本人の参加者は、ニューヨーク日本クラブ（the Nippon Club）会長の高峰讓吉（1854 - 1922年）、第一高等学校の校長であり東京帝国大学で教鞭をとる新渡戸稲造（1862 - 1933年）、シカゴ大学政治学専門講師の家永豊吉（1862 - 1930年）、ジャーナリストの安達金之助、横浜正金銀行ニューヨーク支店長の一宮鈴太郎、『オリエンタル・レビュー』（*Oriental Review*）編集員の本田増次郎（1866 - 1925年）、そしてイエール大学助教授の朝河貫一（1873 - 1948年）と、7名の名前がプログラムに掲載されている<sup>(62)</sup>。

朝河は「仕事というよりも楽しむつもりで参加することにする」と日記に残しているが、それもそのはず、親しい知人の集う大会だったのである。上記日本人以外にも、イエール大学のラッド（George Trumbull Ladd）教授及びハンティントン（Ellsworth Huntington）助教授、ボストン美術館のラングドン・ウォーナー（Langdon Warner）、ピボディー美術館のモース（Edward S. Morse）博士といった交流のある日本研究者も報告者として参加していたのである。朝河自身は、最終日の午後のセッションで「封建時代の日本が新日本に与えた功績を例証する」（“Some of the Contributions of Feudal J. to New Japan”）<sup>(63)</sup>と題して、約50分間話した。これは後日、巻頭論文として *The Journal of Race Development* に掲載されるが、本誌はアメリカ心理学学会（American Psychological Association）の創設者であり且つクラーク大学

の初代学長でもあったスタンレー・ホール (G. Stanley Hall) の編集によるものであった。本誌は *The Journal of International Relations* と名称を変えることになるが、アメリカに於いて国際関係を論じる最初の専門雑誌であった<sup>(64)</sup>。

では、日本研究及び日米関係に関心をもつ研究者及び知識人が集まる大会で、朝河が報告した日本論とはどういうものであったのだろうか。タイトルは、「封建時代の日本が新日本に与えた貢献を例証する」と訳せるが、この「貢献」とは封建制の日本の中で生まれ育った「武士道」がその根源にある。新渡戸稲造の『武士道』(*Bushido: The Soul of Japan*, 1900) の出版により、アメリカに於いてその思想が学者だけでなく一般にも認知されるようになったこともあり、朝河は、一応先輩の著書に言及する。但し、それは徳川時代に限定したものであると脚注で示し、自身の研究は歴史学的考察に基づくものであると差異化する。そして、12世紀後半に於ける誕生から19世紀半ばまで長きに亘って成長し、近代国家を誕生させた日本特有の思想としての「武士道」論を展開するのである。

朝河は「武士道」を成す基本的概念は「忠誠」及び「名誉」であると言う。戦国時代の「武士道」の中には「ご都合主義」が見られるが、これは17世紀になると否定され、真実を探求する心として発展を見せ、20世紀に入ると「訓練」や「教育」により鍛えられるべき思想となったと説明する。1911年という時代はアメリカに於いても日本と同様に女性運動が発展を見せていたが、朝河の研究にも女性学的視点が見られる。「武士道」という思想を語る中で、その解釈は保守的ではあっても封建社会の女性への影響に言及するのを忘れない。朝河は「武士道」が有する「忠誠」、「名誉」、及び「犠牲的精神」という美德が日本女性を道徳的に高めていったと分析する。

さらに比較史観も見られ、西洋の「個人主義」と日本の「武士道」とを比べつつ、近代ヨーロッパ文明の鍵が自己実現であるならば、自己制御と自己犠牲とが封建社会の人間の必須条件であったと述べる。そして「武士道」こそが、日本特有のものであることを、仏教、キリスト教、神道との比較に於いて明らかにする。説明はいたってシンプルである。仏教もキリスト教も外国から来た。神道は少数の人(吉田派)が作った。だが「武士道」



は人々の習慣が変わっていくように、12世紀後半から始まる封建期700年の間に発展を続けた日本独自の思想だ、というわけである。

また「武士道」との関係に於いて封建社会の日本で成長を見せた禅宗に注目する。精神性を求める武士は、集中力を養う思想にひかれ、禅宗を支持した。17世紀に入り平和な時代が訪れると、教義が大衆に広まることはなかったが、その精神は全階級に及び、影響力は文化芸術面に見られると指摘する。加えて、主従関係及び平和と秩序を維持する思想として徳川時代後半に成長を見せた儒教の影響にも触れている。

以上は新日本と呼ばれる以前の日本事情だが、19世紀も半ばになると日本も海外からの圧力から自由ではなく、中央集権的な統治の必要性が求められてくる。これに役買ったのが徳川時代の社会道徳体系であり、これが明治維新を可能にしたと朝河は主張する。「自己否定」及び「忠誠心」という精神的な理想が、国家統一の動きとあっていったというわけだ。

こうして封建制度の時代に成長を見せた国民的精神性を解き明かした後、朝河は社会構造の分析を試みる。まず、平和な社会及び将軍の政治力がその特徴となる封建制社会の後期である徳川時代に生まれた「侍」、「百姓」という支配者及び被支配者の共存について言及する。朝河はこれを「二つの階級」と呼んでいるが、政治的な力関係に於いては前者に分があったとしても、後者は自分が耕す畑に関しては実質上所有者であったために、社会的・経済的地位は保証されていた点に注目する。そしてどちらの階級も「忠誠心」、「自己鍛錬」という美德を備えていたので、これが維新を成功させ近代国家へとつながったのであると結論づける。

現実には「侍」には経済力が無かった。他方、「百姓」には精神力の修業が欠けていた。しかし双方とも「武士道」の教育を受けることにより国家を発展させるという理想を抱くことができるようになっていく。そうして、国を愛する心と国家への献身は階級を超えた武士道の新しい形となるわけだ。こうして朝河は、新日本が一つの国家の下にある一つの国民という理想社会を目指していったとまとめるわけだが、新たな社会問題、つまり経済発展により出現した「分離」という格差現実を指摘するのを忘れない。

最後に、日本の天皇制について言及する。朝河はこれを日本最古の機関であるとし、封建時代にその力は弱まっていたとしても、明治になって天皇への忠誠心と郷土愛が同じものであると考えられるようになった点を指摘する。明治憲法に関しては、主権が天皇の手中にあるが、朝河はここに独裁的な力の存在は認めない。歴史上そういうことはなかったし、それを望むような「気まぐれ」を日本人は起こさないからであるというのがその理由である。朝河は「天皇は大君というよりも父性の精神であった」つまり、「社会的には家族のような存在であり、政治的には非人格的である」という不文律が1000年以上続いている事実を日本社会の特徴として挙げる<sup>(65)</sup>。

以上、論文の概要を順を追ってまとめてみたわけだが、封建主義の思想史的影響から観る日本論が、朝河がアメリカの聴衆に語る日本であったと推測できる。クラーク大学に於ける学会の後、12月8日にはイェール大学の国際的研究会コスモポリタン・クラブ (Cosmopolitan Club) で「禅」について話すという記述があり、翌1912年の明治天皇崩御に際しては、天皇及び乃木將軍の切腹についてコメントを求められている。同年5月の授業では「武士道」がテーマになっており、11月には師範学校で、女子学生を聴衆に「日本の女性」についての講演を行っている。また、年末の日記には、同僚と大日本帝国憲法について話をしたという記述も見られる。日記に記録されたタイトルのみでの情報で、朝河の講演の内容を想像するのには限界があるが、上記論文の存在はこれを可能にする。

## カリフォルニアの排日土地法案をめぐる

朝河は各方面から日本関係の専門家としての意見を求められていたが、1913年西海岸で排日の運動が起こった時も同様であった。5月6日にはクラーク大学のある町のウースター・エコノミック・クラブ (Worcester Economic Club) から早速依頼が入る。しかし、朝河は自ら引き受けることはせず、代わりに家永を紹介する。カリフォルニアにおける排日土地法案<sup>(66)</sup>にジョンソン州知事が署名をした翌々日の5月21日には、ニューヨークの一宮から連絡が入る。駐米大使をはじめ日本人及びアメリカ人の友人たちが抗議文

を書くのに朝河の協力を求めているという。しかし朝河は、ここでも消極的であった。この件に関する朝河の姿勢については間宮國夫の「朝河貫一と移民問題」<sup>(67)</sup>に詳しい。間宮は朝河書簡等を資料に、当問題に関して、朝河の扱い方と日本に於ける論調とは性格が異なっていた点を指摘する。朝河は、日本の世論及び新聞報道はカリフォルニアの問題を被害者として論じ、そこに人種差別があるという理由で非難を繰り返すにとどまっているが、排日運動は日本の中国政策と共に論じられるべきであるという立場をとっていたのである。中国に於いては侵略主義的な行為をしながら、そこには触れずにアメリカにおける排日問題のみを批判していてもアメリカ世論を動かす力には成り得ないというのが朝河の意見であった。

一宮に相談を受けてから10日後、朝河はハノーパーのタッカー夫人(Mrs. Tucker)に手紙を書く。それによると、大使から間接的にはあるが日本カリフォルニア問題に関して記事にしてもらえないかと何度か打診されたことを報告している。朝河は「日本人は劣民族ではないという議論は、ばかばかしい」と一蹴し、「問題は、(1)人種の違いに優劣をつけることであり、(2)所謂経済レベルの差であり、(3)新しいアングロサクソンの植民地では必ず表れる人種の自己防衛的性質の誇張された感覚なのである」<sup>(68)</sup>と論点を挙げる。

朝河がタッカー夫人への書簡で批判しているのは、日本カリフォルニア問題に対する日本側の議論の仕方なのである。朝河は、人種論が感情論に変わってしまったのでは解決はないと言い、世論がそこに留まっていることに苛立を覚える。また、移民に関する日米間の取り決めに関しては、1908年の紳士協定があり、日本人の移民問題はこの件を無視しては議論の進展はあり得ないというのが朝河の考えである。朝河は、排日法案のみを取り上げて被害者として激昂している日本側の姿勢を自己中心的だと捉え、この段階に於いての公式意見は控えたというわけだ。

同年6月12日、一宮に手紙を書く。ここにカリフォルニア問題で協力できない最大の理由が、「其節御話の件ハ多少学問を汚さねば致し難く、当然の「国の為」といふ点より一時智識を融通することゝ相成、今日申すこと

他日自ら矛盾することを申さねばならぬ時あるべきは明白に候間、之八私の領分以外と存候。学問と公益と相合する時八他の勧誘を待たず尽力致候へども、国の為に真理をやりくりすること八他に其人あるべし、私の取るべき道にはあらず候<sup>(69)</sup>と記されてある。

真理を探究する学者としての姿勢は徹底していた。門外漢のことは謙虚に避けた。例えば、イエール大学美術大学院のケンドール (W. Sergeant Kendall) 教授が、日本美術を紹介する催しを計画し、朝河に相談した時のことである。ケンドールは朝河が語れるものなら何でも良いと講演を依頼するが、朝河は、自分は美術史の専門家ではないので力が及ばないと断る。そして代わりに、ハーバード大学の姉崎正治 (1873 - 1949年) を紹介する。姉崎は当時2年間の予定でハーバード大学日本文明講座客員教授としてケンブリッジに滞在していた。熱心なキリスト教徒であり、1904年には朝河の恩師横井時雄とともに『時代思潮』という雑誌を発刊しており、朝河がイエール大学で教え始めた1907年、カーン奨学金による世界周遊旅行の際に、ニューヘイブンに立ち寄っていることから、二人の間には継続的に親交があったことが伺える。人間的な面だけでなく、朝河は同氏を研究者としても尊敬していた。姉崎は宗教学者であるが、美術論にも明るい<sup>(70)</sup>と知る朝河は、同僚ケンドールに彼を推薦するのである。本稿の初めに、「(朝河は) 自信と良心が許さなければ一言も一文も公けにしなかった」という姉崎の追悼文を紹介したが、こういったところにもその根拠を見いだすことができる。

## 日本からの依頼

相談や依頼はアメリカだけでなく、日本からも入ってくる。1913年5月18日の日記には、大隈重信に牧野の依頼を断ったという内容の返事を送ったと書いてあるし、6月15日には、モホク湖畔 (Lake Mohonk) での大会の参加報告文を大隈に送る準備が整ったという記述がある。この「牧野の依頼」というのは、大隈の紹介で著者本人から朝河に届けられた牧野義智著『最近外交事情』(金港堂、1912年)の翻訳であった。朝河はこれを「特別の

御依頼」と受け止めながらも、きっぱりと断っているが、本手紙には上記のカリフォルニア問題時にも見せた学者としての自負と責任とが読み取れる。朝河は、「小生の事業上又地位上、小生八独創の研究に専心せざるべからず。之に対する時間すら乏しく候間、現存の人の出版せる通俗的著書は（如何ニ良書にもせよ）小生ニおいて単ニ之を翻訳するが如き八その時間を得るの法なく候。即ち学者として八、未だ曾て人類に知られざりし新資料又八新知見を学界ニ貢献することが専務にして、之が時間の不足なるに当りて、世界の一部ニ既ニ発表せられ熟知せられたる智識を単ニ他部ニ向ひて紹介する如きことニ時間を用うる余裕更に之なく候」<sup>〔71〕</sup>と、自己の立場を説明し、同時に次のような助言を加える。「識者にも読まれん為ならば、引照正確のみならず、又精透ならんことを要し候。貴著を拝読するに、日米関係二つきて未だ根本材料を尽されざるものあり。もし更に広く御研究被遊候はゞ、多少貴説の形を変ずるの結果を生ずることあるべしと存候」<sup>〔72〕</sup>と、出典を明らかにし、きちんとした資料を用いるようにと諭すのである。

「モホンク湖畔での大会」とは1913年5月14日から16日、ニューヨーク州の北に位置する別荘地、モホンク湖畔で開催された第19回国際仲裁会議のことであり、朝河は唯一の日本人として2年続けて招待されている。本会議は1894年大会を最初とし、1920年に常設国際仲裁裁判所が成立されるまで、国際紛争の平和的処理を目的に催されてきた国際会議であった。当時大隈は『新日本』という総合雑誌を主宰しており（1911年創刊、1917年廃刊）、朝河はここに寄稿する。そして、同年11月号及び12月号に、それぞれ「モホンク湖畔国際仲裁主義十九年會の記（上）」<sup>〔73〕</sup>、「同（下）」<sup>〔74〕</sup>として、会議参加報告が掲載されることになる。

朝河はこれが日本の読者への新情報であることを意識していたので、会議の成り立ちから説明する。まずは、本会議が会員制をとらずに米国の実業家アルバート・スマイレー（Albert K. Smiley, 1828 - 1912年）により運営維持され、毎年300名余りの客が招待され、大学教授、外交官経験者、法律家を中心に、新聞記者、議会議員、州知事などがその名を連ねると伝える。そして「国際仲裁」という言葉がまだ浸透していない時代に、「平和」ではな

く「国際仲裁」という言葉をその名に用い、国際法による調停を主義とした現実路線を「米国の平和運動」として評価する。

会議は3日間で計6回行われたが、朝河はこれを会議毎に纏めている。講演者の紹介を加えながら読者に考察の論点を提供するという手法をとっているが、第一会議に関しては「平和主義」の意味を巡っての議論を紹介する。そこで、まず引き合いに出されるのは、自称平和主義者のライマン・アボット (Lyman Abbott) 牧師である。朝河は、彼が、平和と国際仲裁とは異なり、秩序を保つためには国内に巡查を置くように国際に於いては兵備の必要があるという考えを披露したことで、ある平和団体から除名されたという例を引き、「平和主義」という概念が定まっていないのがアメリカの現状であると伝える。

第二会議に関しては、コロンビア大学のシェパード (Wm. R. Shepherd) 教授のモンロー主義に関する論文発表を中心とした報告となる。朝河は歴史学に基づいた論説に感銘を受け、自らもモンロー主義の歴史の変遷及び国際関係に於ける影響力について考察する。シェパード教授は、モンロー主義を法律とみなしての国際仲裁はアメリカ世論の支持を得ないであろうという主張だが、これには朝河も同意する。そもそもモンロー主義は、米大陸を欧州列強から守るという戦略的なものであったが、合衆国による中南米の政治干渉に利用され始めると法律的な意味合いをもつようになってきたというその複雑化現象に、朝河は日本の外交史を当てはめてみる。そして中国に於ける「機会均等」、「領土保全」という主義は、モンロー主義に比べれば新しいものであるが、すでに事態は混乱している点を挙げ、さらに複雑化していくであろうと予想する。

第三、第四会議の報告は講演者名と演目を挙げただけであるが、最終日の第五会議報告にはかなりのページ数を割いている。まずは、パナマ運河に関する議論の紹介からであるが、司会役の前ベルリン駐在米国大使タワー (Charlemagne Tower) 氏が「運河の使用は列国絶対に平等であるべきことが歴史の結論である」と主張する。そして、それに続いて、賛成派及び反対派が意見を戦わすわけだが、朝河は、1901年の英米条約で「凡ての国

民」の運河使用を認めたにも拘らず、米国のみが使用税を免除されるという米議会の設定した法律を巡る論争を、人名を挙げながら紹介する。つまり、こういった議論の中身を具体的に挙げることにより「米国人の中には正義を重んじ他国に対する過失を匡正することを真の愛國心と心得た人々の少なくない」事実を日本の読者に伝えるのである。さらに世論というのが政府を動かしている点、及びこれがウィルソン大統領の目的である点を指摘するのであるが、朝河は中国問題に関して批判に晒されている日本人に、自国中心主義に陥ることなく、反省する謙虚さを持ちながら主張する術を身につけるようにと助言しているのである。

最後は、カリフォルニア問題に言及し、アメリカが「世論の國」であるからこそ、日本はその世論を育てるように努力する必要があると忠告する。そして、「粗大な條約違反論」「独り合點の國民名誉論」「見當の外れた人種優劣論」「日本民族は蒙古人種でないといふ突飛な説」に影響された日本側の議論がアメリカに報道され、逆効果を生み出しているという現状を認識するようにと警鐘を鳴らす。

## 書評及び新聞記事

日本研究関係の出版物の書評依頼も定期的であり、朝河は英書に限らず、フランス語やドイツ語で発表された出版物に関してもその紹介文を書いた事実は「朝河文書」に確認できる。しかし、これはまだ殆ど知られていない。朝河研究者にとって非常に役に立ってきた『朝河貫一書簡集』でさえ朝河の著書や論文、その他新聞記事に関しては、かなり詳細な著作目録を掲載していても、書評に関しては取り上げていない。本稿で扱った『早稲田学報』に記載されてある「朝河貫一博士著作」の一覧表も「書評および講演要旨は略す」<sup>(75)</sup>との但し書き付きである。そこで本稿では「朝河文書」<sup>(76)</sup>に収められてある朝河による書評本の紹介をする。邦訳があるものはそれに従うが、ないものに関しては便宜上の日本語訳を添える。またこの資料は切り抜きであるので、書評の掲載年月日に関しては朝河がメモ書きを残してあるものに関してのみ明らかとなるが、他は調査の余地がある。以下

は書籍の出版順とする。

- 1) サー・ロバート・K・ダグラス著 『ヨーロッパと極東』( *Europe and the Far East*. By Sir Robert K. Douglas. Cambridge, the University Press, New York; Macmillan, 1904 )。これはケンブリッジ・ヒストリカル・シリーズの一冊である。
- 2) デイヴィッド・ムレイ著 『日本』改訂版 ( *Japan*. By David Murray, Ph.D., LL.D. Revised edition. New York: G. P. Putnam's Sons; London: T. Fisher Urwin. 1906 )。ムレイはお雇い外国人の一人であり、1873年から1879年まで文部省顧問であった。
- 3) E・パピノ著 『日本の歴史・地理事典』( *Dictionnaire d'histoire et de Geographie du Japon*. Par E. Papinot, M. A. Tokyo: Sansaisha; Yokohama, etc.: Kelly and Walsh. 1906 )。
- 4) マークス・ドウ・ラ・マゼリエール著 『日本：歴史と文明』第1、第2、第3集 ( *Le Japon: Histoire et Civilizaiton*. Par le Marquis De La Mazeliere. Paris: Plon, Nourrit et Cie. 1907 )。第1集は古代日本、第2集は封建日本、第3集は徳川時代の日本となっている。
- 5) ヴォン・ユスタス・レオ著 『日本の心の発展史』( *Die Entwicklung des altesten japanischen Seelenlebens*. Von Justus Leo. [ Beitrage zur Kultur-und Universalgeschichte herausgegeben von Karl Lamprecht. Zweites Heft. ]( Leipzig, R. Voigtlander, 1907, pp. Vii, 106 )。
- 6) A・L・スミス著 『フレデリック・ウィリアム・マイトランド：講義録及び文献目録』( *Frederic William Maitland: Two Lectures and a Bibliography*. By A. L. Smith, Oxford: the Clarendon Press, 1908 )。
- 7) 大隈重信著 『開國五十年史』( *Fifty Years of New Japan*, New York: E. P. Dutton and Company. 1909 )。2集から成り、英文の編集者はマークス・B・ヒュイツシュ ( Marcus B. Huish ) である。
- 8) シュンキチ・アキモト訳 『井伊大老と新日本』( *Lord Ii Naosuke and New Japan*. Translated and adapted by Shunkichi Akimoto from *IiTairo to Kaiko* by Katsumaro Nakamura. Tokyo, Printed at the Japan Times. 1909 )。オリジナルは1909年に啓成社から出版された中村勝麻呂『井伊大老と開港』である。
- 9) ウェルズ・ウィリアム著 『ペリー遠征随行記』( *A Journal of the Perry Expedition to Japan( 1853 - 1854 )* By S. Wells Williams. Edited by F. W. Williams. Yokohama: Kelly and Walsh. 1910 )。編者として名前が挙げられているF・ウィリアムズは著者の息子であり、イエール大学大学院で朝河が師事した東アジア研究者であるのは先に述べた通りである。
- 10) マークス・ドウ・ラ・マゼリエール著、前掲『日本：歴史と文明』第4集、第5集。第4、5集とも、近代日本がテーマであるが、第4集は1854年から1868年の革命維新期を扱い、第5集は1869年から1910年までの日本の転換期を押さえていることが副題より分かる。
- 11) ジェイムズ・マードック著 『日本の歴史』( *A History of Japan*. By James



Murdoch, M. A. Volume I. From the Origins to the Arrival of the Portuguese in 1542  
A. D. Yokohama, Shanghai, Hongkong, Singapore: Kelly and Walsh, Ltd.; London:  
Kegan Paul, Trubner and Company, Ltd.: Leipzig: Otto Harrassowitz. 1910.)

以上は『アメリカン・ヒストリカル・レビュー』(*American Historical Review*)  
に掲載された書評本であるが、朝河は『ネイション』紙(*The Nation*)の書  
評委員でもあった。本稿では主に明治から大正へと元号が変わる時期の史・  
資料を扱ってきたが、この時期のものでは、1913年9月11日、マリー・  
C・ストープス(Marie C. Stopes)の『旧日本の演劇：能』<sup>(77)</sup>についての評  
が掲載されているので、これを紹介したい。朝河はまず、東洋の最も優れ  
た文学形態に入る能を英語圏へ「優雅」に紹介し得たことを称える。そし  
て能そのものの歴史的背景及び今日の日本での位置について説明を加えな  
がら批評していく。具体的には、能は14世紀及び15世紀の武家社会で流行  
したものであり、実話や伝説の戯曲化であるといった歴史的側面から入り、  
仏教の無常観が存在するといった宗教的側面からの説明をする。そして新  
日本人には遠く離れたもののように感じられており、一部の階層がその謡  
を楽しむ程度であると現代の社会的側面からの分析を加える。本著には翻  
訳が含まれているので、その間違いの指摘もしているが、特筆すべきは、  
「ストープス女史がもし、大隈伯爵編 *Fifty Years of New Japan*<sup>(78)</sup>に収録されてい  
る坪内教授の能の歴史に関する部分を読んでいたら、より端的に説明  
できたかもしれない」と、二人の恩師の名前を登場させた点であろう。こ  
れには「思い切って申し上げるならば」と控えめな言葉も付け加えられて  
いるが、朝河が坪内を研究者として尊敬していた所以である。

こうして、日本関係学術書の紹介に貢献した研究者としての側面<sup>(79)</sup>も見  
えてくるわけだが、最後に、1913年12月31日、朝河自身が記事になった  
例を挙げよう。モース博士に招かれた時のことである。翌日の『セイレム・  
イヴニング・ニュース』には、「日本人教授セイレム訪問」の記事が掲載さ  
れる。100文字に満たない短い記事であるが、次のような内容である。「イ  
ェール大学の日本史教授朝河博士が、エドワード・S・モース博士の招待  
を受け昨晚到着。本日ピボディー美術館を訪問し、新しく加えられたコレ

クションを見学する。朝河博士はホートン・ミフリン出版『日露の衝突』などの著作がある。セイレムにはこれまで何度か訪れたことがあり、本美術館のコレクションは全米最大の規模であり最も優れたものであると絶賛した<sup>80)</sup>。ここで朝河は、イエール大学日本史教授という責任のある立場、及び『日露の衝突』の著者であるという学識の高さをもって、モース・コレクションの鑑定者となったわけである。

## おわりに

私の朝河研究の中心には朝河が残した英文日記がある。これを縦糸にして、様々な史・資料を読み解きながら、徐々に見えてきた「国際人」朝河を、さらに掘り起こしている。今回は田中文男の『北米日記通信』が、執筆のきっかけとなった。朝河の日記に登場する人物名をインターネットで検索していたら、「山陰但馬浜松温泉 御やど 雅松亭」の公式サイト<sup>(81)</sup>にヒットした。そこにタキシード姿の田中の写真、年譜、そして本書の内容の一部が掲載されていたのである。本稿で引用した「食卓では日本語を使用す可からずと云ふ朝河さんの發議で、究屈なる事夥しく、實際これでは食物が消化しない」という一文が、現代仮名遣いで紹介されている。朝河の生活面について語られたものは多くはなく、私は早速本書を探ってみたくなったというわけである。

本稿は朝河研究を目的としているので、『北米日記通信』については、朝河及びその周辺に関する面しか取り上げなかったが、第一次世界大戦時のアメリカ社会を一留学生の目で描いた好書であり、文化社会史的研究の一級資料である。そういった観点からの再読の必要もあろう。

個人史研究の方法は資料の種類により変わってくるが、朝河の場合「イエール日本人會名簿」に記載されてある人物から新たな研究のきっかけが生まれる可能性があるかもしれない。ただ名簿にある全員について調べるのは果てしない作業のように思われるし、中には朝河と関わりをもつことのなかった人もいるであろう。そこで、順序としては朝河の日記に登場す

る人物による書簡や日記、或いは出版物を探るのが賢明な方法だと思われる。まだ知られていない朝河の一面が潜んでいるかもしれない。

最後に、本研究の横系となる日記以外の史・資料、特に朝河の論文や雑誌記事の扱いに関してだが、長い間図書館の中で眠っていた資料であるので、まずその中身を紹介すべきであると考え、本稿に於いては要約という形に留めた。しかし、論文「封建時代の日本が新日本に与えた貢献を例証する」は、朝河の封建制度史研究の中で議論されるべきものであろうし、雑誌記事「ノモホンク湖畔国際仲裁主義第十九年會の記」は朝河のアメリカ史観を知るのに有用な資料である。さらなる調査及び考察が必要となるわけだが、今後の課題としたい。

(注)

- (1) "KAN-ICHI ASAKAWA OF YALE DIES AT 77," *New York Times*, August 12, 1948.
- (2) 「浅川貫一(エール大学名誉教授)」『朝日新聞』1948年8月13日付；「浅川貫一(エール大学名誉教授)」『毎日新聞』1948年8月13日付；「浅川貫一氏(エール大学名誉教授)」『読売新聞』1948年8月13日付；"Dr. Kanichi Asakawa Passes Away In East." *Pacific Stars and Stripes*, Aug. 13, 1948; "Prof. Asakawa of Yale Dies." *Nippon Times*, Aug. 13, 1948. 朝日、毎日、読売各紙とも「朝河」を「浅川」と表記した点は朝河の名前が日本人に浸透していなかった証拠として、研究者により指摘されてきたが、本稿で取り上げる『早稲田学報』1948年10月号に朝河を偲ぶ記を寄せた島田孝一もこれに触れている。
- (3) 小松芳喬「国際的史学者朝河貫一」『早稲田学報』第3巻第9号、1949年10月20日、4ページ。
- (4) 島田孝一「先輩につづけ」同上。
- (5) 姉崎正治「朝河貫一の追憶」同上、5ページ。
- (6) 竹内松治「若き日の面影」同上、5ページ。
- (7) 脇本本次郎「朝河教授のアメリカ生活」同上、6ページ。
- (8) 岡村千曳「朝河教授の思ひ出」同上、7ページ。
- (9) 増井由紀美「英文『朝河貫一伝』」『ソフィア』第50巻第2号、上智大学出版、2002年、48-62ページ。
- (10) 角田柳作「故・朝河貫一博士を思う」『毎日新聞』1953年9月24日、8ページ。
- (11) ドナルド・キーンは朝河の思い出を語る時にはこの点を強調する。斎藤襄治の「幻の米國大統領親書」『幻の米國大統領親書』(北樹出版、1989年、34ページ)にも指摘されている。
- (12) 増井由紀美「教え子の語る朝河貫一博士 Mrs. Rouse へのインタビュー」『朝河貫一研究会ニュース』第23号、1995年12月、3-8ページ。
- (13) Yale University, Sterling Memorial Library, Manuscripts and Archives, Group Number 40, Kan'ichi Asakawa Papers, Series No. II. Box. 5, Folder Nos. 45-53. 朝河の日記の1900年から1925年のものがここに収められている。本稿での日記からの情報は本文中に日付を入れている。以下 Asakawa Papers と略す。
- (14) Asakawa Papers, Series No. III. Box. 60, Folder No. 296.
- (15) 『日本帝国文部省年報』上巻、第41-43、文部大臣官房文書課、1913-1916年。

- (16) 「文部省外國留學生表」文部省専門學務局、1917年3月31日調、3ページ。
- (17) 同上、6ページ。
- (18) 同上、21ページ。
- (19) 田中文明『北米日記通信』、田中教授在籍二十五年祝賀記念会、1935年、見開き1ページ。
- (20) 同上。
- (21) 同上、5ページ。
- (22) 同上。
- (23) 英文は“A gentleman wants two or three rooms, furnished or unfurnished, near bath, after Aug. 25. Address K. A., 228 park St.” 8月4日月曜日から9日の土曜日まで6日間掲載された。“Rents Wanted,” *New Haven Evening Resister*, August 4-9, 1913.
- (24) Douglas W. Rae, *City: Urbanism and Its End*, New Haven: Yale University Press, 2003, p. 130.
- (25) *Ibid.*, pp. 132-134.
- (26) 朝河は散歩を習慣としていたが、或る歴史家はこのゆるやかな坂道を、ニューヘイブンで最も美しい通りの一つであったとコメントしている。Doris B. Townshend, *The Streets of New Haven; The Streets of New Haven*, Second Edition, The New Haven Colony Historical Society, 1998, pp. 96-97.
- (27) 田中、2ページ(「序言」のページ番号)。
- (28) 同上、6ページ。
- (29) 同上、7-8ページ。
- (30) 同上、28ページ。
- (31) Rae, p. 88.
- (32) 田中、53-54ページ。これは7月4日、独立記念日の祝日で、昼食がいつもよりも豪勢であったということである。5月の日記にも同様な報告があり、こちらには食事時間が記され、朝昼晩それぞれ8時、13時、18時であったことが分かる。
- (33) 同上、32ページ。
- (34) 同上、8ページ。
- (35) 同上、14ページ。
- (36) Asakawa Papers, Series No. II. Box. 5, Folder No. 46.
- (37) 田中、14ページ。
- (38) 同上。
- (39) 同上、2ページ。
- (40) 同上、21ページ。
- (41) 同上、32ページ。
- (42) 同上、34-35ページ。
- (43) 同上、35ページ。
- (44) 同上。
- (45) 同上。
- (46) 同上、52ページ。
- (47) 同上、66-67ページ。
- (48) 同上、66ページ。
- (49) 同上、67ページ。
- (50) 同上、74ページ。
- (51) 同上、73ページ。
- (52) 同上、74ページ。

- (53) 同上、79 80 ページ。
- (54) 同上、9 12 ページ。
- (55) 同上、76 ページ。
- (56) 同上、14 ページ。
- (57) 同上、94 ページ。
- (58) Asakawa Papers, Series No. III, Box. 60, Folder No. 296.
- (59) Anson Phelps Stokes, *Memorial of Eminent Yale Men: A Biographical Study of Student Life and University Influences During the Eighteen and Nineteenth Centuries*, Vol. I, II, New Haven: Yale University Press, 1914.
- (60) *Ibid.*
- (61) 朝河貫一書簡集編集委員会編『朝河貫一書簡集』書簡52、187 188 ページ。
- (62) Asakawa Papers, Series No. I, Box. 2, Folder No. 18. また高峰譲吉に関しては“read by M. Honda, Litt.D.”との記述が付加されているので論文参加だけであったのかもかもしれない。
- (63) Kan'ichi Asakawa, “Some of the Contributions of Feudal J. to New Japan,” *The Journal of Race Development*, Vol. III, No. 1, July 1912, pp. 1-32.
- (64) <http://www.clarku.edu/aboutclark/timeline/1910s.cfm>
- (65) Asakawa, *op. cit.*, pp. 1-32.
- (66) カリフォルニアにおいて日本人農業移民の土地所有権及び借地権などが禁止又は制限されるという法案が5月の初めに州議会を通過した。
- (67) 間宮國男「朝河貫一と移民問題」、朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』、早稲田大学出版部、1993年、187 201 ページ。
- (68) 間宮論文もこの部分を翻訳しているが、解釈が異なる点があるので新たに訳出した。また、文中には朝河の英文日記からであると明記しているが、より詳しくは、タッカー夫人宛書簡の控えであるという点を付け加えておきたい。
- (69) 『朝河貫一書簡集』書簡61、202 ページ。
- (70) 姉崎は1913年から15年までハーバード大学で「日本宗教史」を中心にした講義の担当者となるが、“Art, Life and Nature in Japan”と題した課外講義も行っている。また、ボストン美術館では“Buddhist Art in Relation to Buddhist Ideals”と題して講義したという記録もある。姉崎正治著／姉崎正治先生生誕百年記念会編『新版 わが生涯 姉崎正治先生の業績』、大空社、1993年、参照。
- (71) 『朝河貫一書簡集』書簡60、200 ページ。
- (72) 同上。
- (73) 朝河貫一「モホンク湖畔国際仲裁主義十九年會の記(上)」、大隈重信主宰『新日本』第3巻第12号、富山房、1913年11月、61 70 ページ。
- (74) 朝河貫一「モホンク湖畔国際仲裁主義十九年會の記(下)」、大隈重信主宰『新日本』第3巻第13号、富山房、1913年12月、92 99 ページ。
- (75) 『早稲田学報』第3巻第9号、7 ページ。
- (76) Asakawa Papers, Series No. III, Box. 7, Folder No. 72.
- (77) Marie C. Stopes, *Plays of Old Japan: The No*, New York: E. P. Dutton & Co., 1913.
- (78) 朝河はモホンク記事(上)に会場となったホテルの図書館に本書があったと伝えている。
- (79) 本稿では1910年代まで出版された英語書籍についての英語による批評のみを取り上げたが、1930年代には日本経済関係書をフランス語で紹介している。同「朝河文書」の中には例えば、竹越と三郎著『日本経済史』、東京、1920年、及び同著者『日本文明史の経済的側面』(The economic aspects of the history of the civilization of Japan. By Yosaburo Takekoshi. New York and London, 1930)のフランス語書評が収められており、三浦周行による『堺市史』(1928 - 30)や滝川正次郎の『日本奴隷経済史』についてもフランス語書評を試みている。

- ( 80 ) "Japanese Professor is Visiting in Salem," *Salem Evening News*, December 31, 1913.
- ( 81 ) 2005 年 8 月 17 日 <http://www.kaihin.com/gashoutei/bunka/tanaka> 。